

B チャレ（提案公募型協働事業）【令和元年度】報告書

| | | | |
|---------------------------------|--|-----|-----------|
| 提出日 | 令和2年3月16日 | 記入者 | 篠田 麻友 |
| 団体名 | 特定非営利活動法人サンカクシャ <input type="checkbox"/> 任意団体 <input checked="" type="checkbox"/> NPO 法人 <input type="checkbox"/> 企業 <input type="checkbox"/> その他() | | |
| 事業名 | 孤立した子ども若者を支える、つなぎ支援モデル事業 | | |
| 協働団体 | 1、行政 ・文京区教育センター 2、地域 ・文京区社会福祉協議会 ・地域の居場所運営者（さきちゃんち・こまぎキッチン・こまじいのうち等） 3、大学 ・跡見学園女子大学、東洋大学、文京学院大学、東京大学 | | |
| 自団体 および 協働団体 の 役割分担 | 【自団体】 子ども若者の家庭訪問やアウトリーチ活動とそれに関わるボランティアのマネジメントと育成を行う。関係機関とのケース会議で子どもの気持ちや想いの代弁、子どもを取り巻く環境の情報提供。 【協働団体】 1、行政 ・文京区教育センター：不登校の小中学生や義務教育卒業後のボランティアの関わりを望む子ども若者のケースの紹介・ケース会議の開催、情報共有。 2、地域 ・文京区社会福祉協議会：サンカクシャへ子ども若者の紹介、地域団体との連絡調整、支援記録の作成。 ・地域の居場所運営者：文京区社会福祉協議会へ子ども若者の情報提供。サンカクシャのアウトリーチに協力、情報提供。 3、大学 ・跡見学園女子大学、東洋大学、文京学院大学、東京大学： ボランティア研修の協力、大学資源の活用の協働、ボランティアやアルバイト公募の告知協力 | | |
| 担当者名 | 篠田 麻友 | 役職等 | ソーシャルワーカー |

| | |
|------------------------------------|--|
| <p>部門 (1か2 いずれか ○)</p> | <p>1. 地域活性化部門</p> <p>2. 課題解決部門(いずれかに○)</p> <p>1. 住民居住地域の活動へ参加するキッカケづくり</p> <p>(1) 在住歴の比較的短い住民が、地域活動にアプローチしやすくするための活動</p> <p>(2) 高齢者の自主的な取り組みを支援する活動</p> <p>(3) 高齢者を地域で見守る環境づくりにつながる活動</p> <p>(4) 地域のつながりから防災意識の向上を目指した活動</p> <p>(5) 受動喫煙防止に取り組む区内飲食店を支援する活動</p> <p>2. 子どもを地域で支える取り組み</p> <p>(1) 区立小学校における通学中の安全を守る活動</p> <p>② 不登校等で孤立しがちな児童・生徒を支える活動</p> <p>③ 外国にルーツがある児童・生徒についての生活や学習支援活動</p> <p>④ 18歳に到達したことにより行政からの支援が終了するケース(虐待、不登校、引きこもり)等を引き続き地域で支援する活動</p> <p>3. その他、団体の専門性を生かしたテーマで提案された取り組み</p> |
| <p>目的 地域のどんな課題を解決したいかを明記</p> | <p>貧困や虐待や不登校など課題を抱える子ども若者が増え、様々な支援が全国的に行われている。支え手は増えたものの、「支援につながらない子ども若者にどう出会いどう支援するか」という課題は依然として残っている。</p> <p>子ども若者を支える学習支援や子ども食堂が増えたものの、そこに来る子たちは、自ら足を運べる、自立の意欲が高い層が多いとされている。</p> <p>支援につながらない子ども若者は、自立への意欲が低く、人とのコミュニケーションが苦手、孤立状態にあるため、支援者側からの働きかけと長期的な寄り添いが重要である。</p> <p>そうした孤立状態の層を行政だけが支援するのみでは立ちいかない現状がある。</p> <p>①子ども若者を支援する専門職のケース数の増加に伴い、支援者側からの働きかけが難しくなっている</p> <p>②孤立状態にある層は、短期的な支援ではなく、長期的な支援が必要なことが多いので、制度の制約があり、支援が途切れてしまうことが多い。専門職だけでは支援が難しい</p> <p>この2点から、専門職だけではなく、長期的な見守りや寄り添いができる人材が必要である。こうした長期的な見守りや寄り添いを地域で担っていく必要はあるが、地域の支え手や支援者の数が足りないこと、様々な課題を抱える子ども若者に対応するノウハウがあまりないことから、地域で子ども若者を支える新しい人材(非専門職)が必要であると考えている。</p> <p>本事業は、行政(専門職)と民間(非専門職)の連携事業のモデルを作り、孤立状態にある子ども若者を支える仕組み作りを目指す。</p> <p>支援につながらない、孤立状態にある子ども若者を行政と民間で支える仕組みのモデルとなる事業を作り、各地への展開、制度化を見据え、本事業を推進する。</p> |

事業
内容

1. 孤立した子ども若者に寄り添う、非専門職人材ボランティアの育成

○ねらい

主に不登校や不登校傾向にある状態の子どもに寄り添う非専門職人材ボランティア育成を行う。比較的子ども若者と年齢に近い非専門職ボランティアが、「支援」というマインドではなく、雑談、ゲームなど本人の興味関心に合わせた関わりを行い、関係構築を行う。こうした関係を築いていく中で、自然と本人のやってみたくこと、困りごとが出てくるため、そこから適切な支援につなげ、必要な環境を整えていく。こうした関わりを担うボランティアに研修の機会を提供し、育成を行う。

○ボランティアの募集と採用

文京区内の4大学にご協力いただき、計10コマ大学の授業での告知を実施。その他、ボランティアの掲示板や団体のSNSを活用し、募集要項を発信。説明会申し込み人数は100名を超え、サンカクシャ職員による面接を行い、計44名のボランティアが採用された。

○ボランティアへの研修の実施

6月22日、29日に2日間の研修を実施した。採用されたボランティアのうち24名が参加。

研修内容としては、非専門職としてのマインドセットと子ども若者との関係構築のスキルの2つに分けて研修を実施。内容としては下記の通りの研修を実施した。

「非専門職のマインド」

- ・対象となる子ども若者の背景
- ・専門職と非専門職の役割の違い
- ・非専門職に求められること
- ・関係構築とバウンダリー

「非専門職のスキル」

- ・コミュニケーションにおける観察と考察
- ・子ども若者が求めるものの仮説構築と検証
- ・会話が盛り上がる雑談と質問

また、1月11日には、子ども若者の変化を見逃さないための観察の観点の共有とケースの記録の書き方などをレクチャーする研修を実施した。

サンカクシャで開発した子ども若者の自立の度合いの変化を測る指標についても共有し、子ども若者がどのようなステップで自立していくか、またどういう関わりをすると自立につながるのかなどのフィードバックも行った。

2. 家庭訪問等のアウトリーチ活動

教育センターと連携した不登校及び不登校傾向にある生徒の家庭訪問

○ねらい

不登校及び不登校傾向にある生徒に対して、サンカクシャのソーシャルワーカー

及び非専門職ボランティアが家庭等に訪問し、勉強、ゲーム、雑談など本人の興味関心に合わせた関わりを通じて、学校復帰や家庭以外の場につながることを目的とする。

訪問は1回あたり2時間、月に2回をベースとし、本人の都合に合わせてサンカクシャのソーシャルワーカー及びボランティアが対応にあたる。

家庭訪問を行うボランティアについては、研修参加を必須とし、上記研修を受講した上、職員などの面談を経て、家庭訪問担当として訪問する。

教育センターや地域からの依頼を、まずはサンカクシャのソーシャルワーカーが受け、ケースに応じてボランティアの動員が必要かどうかを判断する。

ボランティアと子どもをマッチングする際は、ボランティアのタイプやもっている趣味など、子ども若者との相性をみて判断する。

- ・ケース対応数：7ケース

(内訳…職員による家庭訪問：6、ボランティアによる家庭訪問：1)

- ・継続的な家庭訪問：1ケース
- ・サンカクシャが運営する居場所へつながった家庭訪問：1ケース

3. 家庭訪問以外のアウトリーチ活動

○ねらい

教育センターからのケース依頼を待つだけでなく、こちらから積極的に対象者に会いに行くアプローチも同時に行う。

当初より文京区内の地域の活動の場に対象者がいることを把握しており、対応に困ることもあるという話を伺っていたため、今年度は、地域の既存の団体に定期的に訪問し、対象者を紹介してもらう形のアウトリーチ活動を行う。

地域の多くの団体が中学生までを主な対象としており、高校に進学するタイミングでサンカクシャに繋いでもらうなどの連携を行う。

- ・既存の地域の団体訪問

てらまっち、HONG022515、音羽学びの広場、みちこはうす、宝泉寺子ども食堂、学習支援なごみ、てらまっち子ども食堂、だんだんひろば、さきちゃんち、おもてなし食堂、千石たまご荘、本郷児童館

- ・地域団体からの紹介ケース：4ケース

| | |
|-------------------------------|--|
| <p>協働団体 or 利用者 の声</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ スクールソーシャルワーカーの声 サンカクシャのボランティアさんが、不登校の子どもの訪問をして「人とのつながり」ができたことで本人の表情が変化し、それに伴って学校の対応も変化しました。当初、学校は「ゲーム依存だから病院に行った方がいい」という考えでしたが、本人の表情が良くなっていくのを見て、地域とのつながりの大切さも理解していったように思います。 ・ 家庭訪問を利用する不登校の子をもつ親の声 中学3年生を卒業した後の学校の支援が途切れてしまうのがとても不安でした。引きこもりの娘を残して買い物に行く時、罪悪感がありましたが、ボランティアさんがきてくれる間は、安心して外出ができます。 ・ 家庭訪問ボランティアの声 活動を始めた時は、自分がひとりで子どもの家に家庭訪問に行くとは思っていませんでした。子どもと関わる中で子どもの変化を感じてきて、社会人になっても家庭訪問の活動を続けていきたいと思うようになりました。社会人になって一人暮らしをするなら、文京区に引っ越したいなと思います。 |
| <p>協働による 効果</p> | <ol style="list-style-type: none"> 1. 地域の既存支援団体とのスムーズな連携ができた サンカクシャは立ち上げ間もない団体ではありませんでしたが、もともと地域と関係性が深い社会福祉協議会との協働によって、地域の団体から、地域で孤立している心配な子ども若者の紹介をスムーズに引き受けることができた。また、サンカクシャという団体があるということが周知されるだけでは、紹介にはつながらないので、実際にサンカクシャのソーシャルワーカー及びボランティアが地域団体の活動に参加することで、徐々に子ども若者を紹介されることが可能となった。 2. 地域福祉コーディネーターとの保護者対応 教育センターや地域からのケース対応を重ねる中で、保護者の期待と本人のニーズのズレがあることを感じ、一人の担当者でどちらも対応することの難しさを感じていた。そうした中、地域福祉コーディネーターの方々と一緒にケース対応をすることになり、ケースごとに役割分担を行い、主に保護者や地域資源への接続など中心に対応していただいた。このことで、サンカクシャとしては、本人の関わりにフォーカスをあてることができ、非常に動きやすくなりった。今後も連携を深め、より良い支援が届けられるように役割分担など工夫を重ねていく。 3. ボランティアの募集と採用 子ども若者とのフラットな関わりや非専門職としての関わりを考える際に、子ども若者と年齢も距離も近い大学生の存在は大きくなると考える。文京区には19の大学があり、今回の協働により、大学教授とスムーズにつながることができ、合計10コマ分のべ1,000人以上の大学生に活動の周知やボランティアの募集を行うことができた。今後も大学との連携を深め、研修の内容のブラッシュアップなどを図っていく。 |

①非専門職ボランティア育成の事業成果と今後の取り組み

■育成した非専門職の人数及び子ども若者の課題を周知した人数

- ・活動説明時の接触人数：大学4校延べ人数1,000人
- ・説明会参加人数：106名
- ・育成したボランティアの人数：44名
- ・研修参加人数：60名

活動の周知やボランティア募集を通じて大学生約1,000人に文京区の子ども若者の課題を周知することができた。その他掲示板やSNSを活用し、説明会には100名を超える人数が参加。職員による選考を経て44名のボランティアを採用し、サンカクシャ独自の研修にのべ60名が参加した。

■育成した非専門職による活動

多くの方が関心を寄せて参加したものの、家庭訪問の体制やボランティアマネジメントの体制が追いつかず、活動に参加したボランティア人数は15名ほどと当初の予定を下回った。

まずは、家庭訪問をサンカクシャのソーシャルワーカーが中心に回す仕組みを整えていったのちに、ボランティアを同行及び引き継ぎする体制を構築することの必要性を痛感した。

また、当初は12名ほどのボランティアを採用する予定だったが、予想を超える人数が説明会に参加し、魅力的な人が多かったことから、44名と採用人数を一気に拡大した。

このことから、手持ち無沙汰になるボランティアが多く、1年ほど経つ今、継続参加が15名に減ってしまいました。

ボランティア一人一人のケアをしないといけないため、現状の体制では、15名前後のボランティアの育成が妥当だと感じた。

別事業で、居場所作りを行っているが、今回育成したボランティアが居場所の運営スタッフとしてアルバイトになるなど、運営の中心を担ってくれている。

団体の価値観や非専門職としてのマインドは、研修したらすぐに身につくものではなく、長い時間かけてインストールすることが重要になる。

そうした際に、まずはボランティアから薄く関わってもらい、徐々に関わりを濃くし、ボランティアからアルバイトスタッフ、そして職員という形で採用につなげていけると団体の大切にしている価値観や文化が守られていくと感じたため、ボランティア育成は今後もしっかりと継続して行っていく。

■研修の効果

フィードバックの例

- ・自分のキャラクターや価値観というのを考えたことがなかったので、自分を知る良い機会になりました。
- ・子ども若者と関わる際に、どのように話をしたら良いか具体的な関わりで悩んでいたのが、具体的な関わりを知ることができてよかったです。

事業成果
および
今後の活
動予定

研修の実施は、子ども若者に良い支援を届けることにつながるだけでなく、関わるボランティア自身が自分を知ること、自分の価値観を知ることにつながると考える。また価値観の違う人とのコミュニケーションも学ぶため、子ども若者との関わり以外の場面でも活用できるスキルになると感じている。

こうした研修は、子ども若者に関わる人だけでなく、広く大学生や社会人にも伝えていく必要があると考える。

■振り返りと今後の取り組み

・ボランティアの集め方のコツと工夫

設立して間もない中、ウェブサイトや活動の情報があまりない中で、ボランティアの説明会には100名を超える人に参加していただくことができた。

多くの団体でボランティア募集に苦戦していると聞くと、以下の点を工夫することで多くの関心を寄せることが可能になると感じた。

(1) 課題の重さではなく関わりの楽しさを全面に伝える

「こんな課題がある」「こんなにしんどい子がいる」と伝えるのは、現実をそのまま伝える手段としては有効だが、聞く側からすると、そのような対象者に自分ではできないことはないのではないかと思わせてしまうことが多いと考える。

子どもと関わるのがいかに楽しいか、共に一緒にいることがいかに大切かを伝えること、そして活動のことも楽しく話すことで、こうした活動であれば自分も何かできるかも、関わってみたいと思ってもらえることができ、応募につながると感じた。

(2) 子どもとの関わり、関わりの姿勢やスタンスを具体的に伝える

団体のスタンスにもよるが、子どもとどのような関わりをするのか、どのような関係を築いていくのかを明確に表現することも大事だと考えている。

ほとんどのボランティアが、子どもと関わることにやりがいを見出しており、スタッフの子どもとの関わりの姿勢や考え方を聞き、自分もこのような関係性を築きたいと思って活動に参加する人がほとんどだったため、こうした関わりの姿勢やスタンスを明確に伝えていくことが重要だと改めて思った。

(3) 大学生や社会人などの横のつながりができることを伝える

今の時代、大学生はとて多忙。

やることはたくさんあるし、お金もないことも多いので、アルバイトもしなくてはいいけません。その中で貴重な時間を割いて、この活動に参加してもらうには、得られるメリットを、うち出さなくてはなりません。

関わる大学生に聞いたところ、「横のつながり、また社会人などとのつながりができること」というのがかなりのメリットとして映るようだ。もちろん、得られるメリットばかりを求めてくる人は相応しくありませんが、忙しい大学生に関わってもらうためには、募集側は工夫していかなければいけません。

多くの団体がボランティア募集などの苦戦している現状を聞いているので、サンカクシャで実践して学んだことを、今後はいかにボランティアを募集するかの情報発信などを行うことも検討していく。

・ボランティアマネジメント体制の整備の必要性

今回は、家庭訪問の体制の構築が十分でない中、ボランティアを募集し、かつ当初の想定よりも大幅に多くのボランティアを採用してしまったため、ボランティアマネジメントの必要性を痛感した。

まずは、教育センターや地域の団体とどのような連携を深めていくのかをしっかりと整えていきながら、ケース数の増加に対応させる形でボランティアの募集を増やしていくような形で体制を整えていくことを行っていく。

ボランティア募集に関しても、一気に採用するのではなく、各ケースのニーズに応じて、ピンポイントの採用を次回は取り入れていこうと考えています。具体的にはゲームが好きな子どもが多いので、子どもたちが好きなゲームに馴染みのある人など、子ども若者の興味関心と近い人をボランティアとして採用していく動きを大学などと連携し、構築していきたい。また、ボランティア一人一人のケアも丁寧に行い、ボランティアを通じて何を得意いきたいのか、なぜ関わってくれるのかを明確に把握しながら困っていることや悩んでいることにも目を配り、継続して関わってもらう体制を整えていくことを次年度の目標としていく。

②家庭訪問等のアウトリーチ活動

教育センターと連携した不登校及び不登校傾向にある生徒の家庭訪問

■支援人数

- ・対応数：7 ケース

(内訳…職員による家庭訪問：6、ボランティアによる家庭訪問：1)

- ・継続的に家庭訪問を行っている数：1 ケース
- ・家庭訪問を通じてサンカクシャが運営する居場所へつながった数：1 ケース

■成果

- ・本人の興味関心を通じた関係構築を基盤とした支援

当初の想定通り、ゲームなどの趣味を持つ不登校の子が多いこともあり、職員及びボランティア内でゲームが好きな人を担当につけて訪問したところ、ゲームの話で一気に打ち解けることができ、訪問からサンカクシャが運営する居場所の利用にまで至ったケースがあった。

また、ゲームは得意ではないけれども、子どもから教えてもらうというスタンスで関わったボランティアも同様に関係構築がうまくいき、定期的な訪問に繋がった。このように興味関心を通じた関係構築というアプローチに関しては一定数有効であることが感じられた。

現在は、多様な興味関心に対応できるほどのボランティアスタッフがいないため、今後ゲームが好きな人、特定の趣味を持つ人など大学等と連携し、ピンポイントで

募集をかけるなど行ってきたい。

また、一見遊んでいるだけのように思えるこのアプローチも支援の観点から一定の効果があるということを検証するための取り組みも次年度に向けて少しずつ着手するようにしたい。

■振り返りと今後の取り組み

【対応ケースを増やす】

当初の予定よりも対応ケース数は下回ってしまった。

原因としては、サンカクシャのソーシャルワーカーが主に教育センターと連携をして家庭訪問を行うという順序で支援にあたるのではなく、ボランティア育成から初めてしまったことで、育成に手がおわれ、関係機関との連携体制の構築が十分に行えなかったことが挙げられる。

また、保護者と本人のニーズのずれも大きく、保護者は訪問して欲しいと話すものの、本人が抵抗し、訪問につながらないなどの課題も見えてきた。

今後に関しては、ゲームなどを通じてゆるやかに関係構築を行うとはいえ、「家庭訪問をする」という言葉がどうしても子ども達に抵抗感を感じさせてしまうため、家庭訪問という形でも実施しつつ、ゲーム大会やレクなど参加しやすい場を構え、そうした場にきてもらうようなイベントをベースとしたアウトリーチも行っていくことを検討したい。

②サンカクシャの役割や支援範囲の資料作成と周知活動

また、今年度教育センターと社会福祉協議会と支援を連携したケースを振り返り、サンカクシャがみるべき支援対象はサンカクシャが提供する支援メニュー、できることなどを明確化した資料も作成をし、関係機関に対して説明などを行い、連携の体制を深めていくことにも取り組んでいきたい。

③家庭訪問以外のアウトリーチ活動

■繋がった人数

地域団体からの紹介ケース：4 ケース

■訪問した団体

てらまっち、HONG022515、音羽学びの広場、みちこはうす、宝泉寺こども食堂、学習支援なごみ、てらまっち子ども食堂、だんだんひろば、さきちゃんち、おもてなし食堂、千石たまご荘、本郷児童館

■成果

サンカクシャの構成員は 20 代、30 代と地域の支援者と比較すると若い傾向にある。

義務教育終了後の年代は、年が近い方が関係構築を行いやすいこともあるため、地域で支援してきた子が高校進学などを果たした際に、うまく連携していく体制を構築していった。

その結果、地域からは4ケースほどだが、紹介に繋がっていった。

■振り返りと今後の取り組み

地域の活動に定期的に顔を出し、まずはサンカクシャのことを知ってもらうこと、次にできることや担当者のことを知ってもらうことを重ねていく必要があると感じた。

各団体とも連携することができる、地域全体で、あらゆる年齢を切れ目なく支えていくことができるようになるため、子ども本人の支援だけでなく、地域団体との連携にも注力していきたい。

一方、地域で活動する団体も多いため、全ての団体に定期的に行くことが難しいため、ボランティアも含めて、定期的に訪問する体制については今後少しずつ整えていくことに取り組んでいきたい。

今後は、地域からの紹介件数を増やし、地域の団体とも密に連携すべく、定期的に訪問を重ね、その団体を利用する子どもとも顔がつながり、関係が築けるような体制を整えていく。

※別紙1：事業スケジュール 報告

※別紙2：収支決算報告

※別紙3：関係者マップ 報告（提案時の内容と比較できる状態）

※追加別添1：この事業を通じて制作したチラシなどのデータ

※追加別添2：この事業の様子が分かる写真のデータ（10枚以内）

収入 1,973,614 円

| 費目 | 予算額 | 積算根拠 |
|-----------|-------------|--|
| 「Bチャレ」助成金 | 1,000,000 円 | 課題解決部門 |
| 自己資金 | 973,614 円 | 寄附金(立ち上げ時に募集したクラウドファンディング及び文京区事業への寄附金) |
| | 円 | |

支出 1,973,614 円

| 費目 | 予算額 | 積算根拠 |
|---------|-------------|--|
| 人件費 | 1,360,000 円 | ボランティア育成コーディネーター人件費 時給1,700円×8時間×月10日×10ヶ月=1,360,000円(5月~2月分) ※事業担当ソーシャルワーカーの人件費については他助成金にて補填 時給1,600円×8時間×月16日×10ヶ月=2,048,000円 |
| システム開発費 | 150,000 円 | 子ども若者の支援記録管理用のkintone導入委託費用 |
| 消耗品費 | 114,757 円 | 消耗品 ・ボランティア育成のための名札、文房具一式:18,019円 ・個人情報保管のためのキャビネット:40,352円 ・個人情報を管理するためのファイル一式:11,737円 ・ゲームソフト購入:36,690円 ・名刺印刷代:7,959円 |
| 支払手数料 | 6,590 円 | 研修会場使用料・振込手数料など |
| 旅費交通費 | 100,919 円 | ボランティア及び職員の家庭訪問にかかる交通費 |
| 会議費 | 4,848 円 | ボランティア及び職員のケース会議にかかる飲食費 |
| 広告宣伝費 | 236,500 円 | サンカクシャ活動紹介パンフレット作成委託費及び印刷費 |
| | 円 | |



